

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年9月9日現在

機関番号：53601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370846

研究課題名(和文) 外城・内城と都人社会の比較史的検討による7から13世紀における中国都城史の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of Chinese City Castle History in the 7th to 13th Centurys by Comparative Examination of Outer Castle, Inner Castle and Urban Society

研究代表者

久保田 和男 (KUBOTA, KAZUO)

長野工業高等専門学校・一般科・教授

研究者番号：60311023

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：開封は、新城・旧城・宮城が入れ子状となっている三重城郭制である。宋代においては、中の城郭である旧城は衰退していった。それは、新城の方が高く、防衛上の意義が無かったからである。と同時に、宋は階級・民族的格差があまりない社会であったという背景が考えられる。これ比較して多民族国家である遼や金の都城は、南北連郭型になっており、漢族と遊牧民の棲み分けが見られる。遼の中京や金の中都は、そこから派生した、中原的な外貌を持つ都城である。この形成過程を分析することにより、遼・金という征服王朝の特質を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの研究によって、中国都城が儒教的王権儀礼とくに南郊を行うために特化した空間構成を持っていることに注目し比較検討する地平が見えてきた。たとえば、長安でも開封の間は、新儒学の興起が都城空間に影響を与えている可能性が検討しなければならない。一方、遼金元といった征服王朝は、それぞれ開封を占領し中国文明を北方に強奪しそこからの影響をうけて国作りを行っている。そのなかに王権儀礼についての資料も多く含まれている。征服王朝が儒教的な王権儀礼をどのように取り入れ、それぞれの都城にどのように反映されていたかが今後の課題となる。

研究成果の概要(英文)：Kaifeng was surrounded by a triple wall. In song dynasty, the old castle, which was the middle castle, had declined. That was because the new wall was higher and its defense significance was stronger. At the same time, it can be considered that the song dynasty society was a society with few class and ethnic differences. By comparison, the capital cities of Liao and Jin, which were multi-ethnic nations, had a structure in which the south castle and the north castle were adjacent. There was a distinction between Han and nomads. On the other hand, Liao Zhongjing and Jin Zhongdu was capital cities with an urban structure close to kaifeng. By analyzing this process of formation, I examined the characteristics of the Conquest Dynasty, Liao and Jin.

研究分野：比較都城史

キーワード：開封 洛陽 大都 中京大定府 中都 建康 上京臨瀛府 上京会寧府

1. 研究開始当初の背景

中国の都市は、城郭に囲繞されていることが一つの特徴である。都城ともなると、二重三重の城壁が建設され、皇帝はその中心に位置する宮城にて政務・儀礼を実施しながら生活を送る。都城の城郭の平面プランは、隋唐長安城に代表されるように国家の権力や皇帝の権威を象徴的に表現するものであった。日本では、そのプランがいかにかに日本の古代都城に移植されたのかという問題を多くの学者が研究している。妹尾達彦『長安の都市計画』講談社 2001 は、中国都城史の一つの到達点ともいえる。妹尾氏は、隋唐長安城の内部構造の形成や変動過程と、東アジア世界の歴史の変動をリンクさせる方法により、説得力のある議論を展開している。ただし、妹尾氏の議論は隋唐の都城の実証的な研究に依拠しているため、北宋以降の都城への継承関係への言及が不十分である。近年高橋弘臣氏は、南宋臨安の都市の形成過程や、その空間構造の変遷について、実証的な検討を積極的に進めている。これにより、従来明らかでなかった、南宋臨安の都城としての性格、すなわち行在としてのそれが、明確になりつつある。ただし、北宋開封からどのように受け継がれ、なにが受け継がれなかったのかなど、比較都城史的な視座を欠いている憾みがある。

拙著『宋代開封の研究』汲古書院 2007 は、北宋都城開封を都城として研究した専著である。妹尾氏や高橋氏と同様に、都市としての開封ではなく、都城としての開封を方法として、北宋の歴史の全体史的な検討をしたものであった。隋唐都城の坊城制の崩壊については、新しい考えを打ち出しているが、後世の都城についての検討は行っていなかった。以上のように、近世都城の研究は個別都城の研究になってしまいがちであった。

2. 研究の目的

本研究の着想の出発点は、熙寧時代の外城の本格要塞化（拙稿「北宋東京外城小考 - 以神宗朝修城を中心」《歴史地理》20 輯）と、中島比「大興城の城壁」『東洋史苑』24-25 合併号によって、7 から 13 世紀における都城の外城・内城の防衛能力の変化に気づいたことである。北宋開封では、外郭城は 12 メートルほどの高さである一方、内城は、低く通行人が上を乗り越えられるほどであった。したがって、靖康の変においては、外城を挟んで戦闘が行われた。ところで、隋唐の長安城では、外郭城はほとんど防衛に役に立たないものであった。市民を防衛しようとは考えられていなかった。この問題と、拙著『宋代開封の研究』（汲古書院 2007）の付章で示した、市民と皇帝の頻繁な空間共有は、関係があるのではないかと考えた。開封では、「与民同楽」と呼ばれる、貴賤混淆が重視されたのである。平面プランの分析にとどまらず、都城の外城・内城の高さという垂直軸の変化にも注目し、それを都城社会の上下和睦という宋代的政治文化の特色と関連づけて考えてみようという研究計画を着想した

3. 研究の方法

本研究は、唐宋変革における都城構造の変化を「政治空間」の変化という観点から明らかにすることを試みた。以下にその構想を述べる。平田茂樹氏は、「政治の場においては皇帝・官僚士大夫・庶民の三つの政治主体がどのように政治に関わって行くのかが問題とされなければならない」とする（平田『宋代政治構造研究』汲古書院、2012 年）。つまり、政治主体として位置づけられる三者が、コミュニケーションをする空間として政治空間が定義づけられる。その意味で、都城空間は濃密な政治空間と言えよう。

私見では、そのような都城空間の政治空間としてのありかたに、庶民が本格的に参入したのは、宋代からなのである。たとえば、隋唐代の皇城の中には、庶民は基本的に居住できなかった。皇城は、公私を分ける役割をもった空間的な分別の境界だったのである。それに対し、開封においては意識的に皇城に相当するような公私を分ける部分は宮城(大内)だけに縮小する。旧城(裏城・内城)には、太廟や社稷などの祭祀施設、尚書省や御史台、外国使節の宿泊施設などの中央官庁があり、長安の皇城と構造的に一致する。違うのは庶民がそこに住んでいることである。公私混淆の空間なのである。すなわち、都城のなかで、皇帝から庶民までの政治的なコミュニケーションを行うような空間として再編された可能性がある。

この政治的コミュニケーションという切り口から、隋唐・北宋・金・南宋・元の各都城の平面プランおよび城郭構造を中心に再検討した。その継承関係、すなわち、受け継がれたこと、受け継がれなかったことをその背景とともに明らかにする計画である。

4. 研究成果

北宋の都城開封と遼の中京について、本計画にもとづいて研究を行い、多重城郭における都城社会の問題を明らかにした。特に、金朝における都城について、多重城郭の意義を明らかにすべく研究をすすめた。その結果、開封や遼の中京との比較検討あるいは継承関係を考えることで、金の上京会寧府と中都大興府の城郭構造についてあたらしい見解を打ち出すことに成功した。これにより比較都城史という都城分析の方法論に確信をもつようになった。

なお、中国都城を王権儀礼から見たとき、11 世紀以降の都城においては、中軸線街路とその周縁の千歩廊、また宮城正南門の構造において共通性を見いだすことができることが判明した。それは唐宋変革の中で、儒教の変革が発生したと平行して起こっている。あるいは、

儒教儀礼が支配者階級だけのものではなく、被支配者との空間共有によって盛大に行われ流ようになったことである。それは、「与民同楽」という言葉で表現される都城繁華をもってして徳治の演出を試みた宋朝の首都開封の都城空間によって検証される。

この開封の都城空間は、靖康の変によって女真族の金朝によって占拠され、儒教王権儀礼についての資料は、北方に流出する。金朝は、儒教儀礼による王権儀礼南郊を、中都遷都を画期として積極的に取り入れていったが、モンゴル帝国元朝はそうではなかった。元朝も宋朝の仮の首都であった臨安を占領し、宋朝が南方で再建した儒教体系を北方（大都）に持ち去る。ただし、クビライは儒教儀礼による王権天授を実施せず、大都は開封の都城空間構造を受け継ぐものの、王権儀礼は儒教式には行われなかった。そこに元大都の特異性があるという結論を得た。今後は、クビライ以降の大都の変化について可能性を考えてみたい。また元大都と遼金都城の多民族性との比較を考えることは、有効な観点であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

久保田和男

- ・「五代十国」と南郊儀礼 中原国家と南方列国における郊祀」『東方学』 137 44-61 頁 2019年1月
- ・「五代・北宋における都城洛陽の退場 中國都城史の轉換點によせて」『東洋史研究』 76(4) 141-175 頁 2018年3月
- ・「金朝における上京會寧府から中都大興府への遷都と都城空間の変化」『史滴』39、2-24 頁、2017年12月
- ・「遼中京大定府の建設と空間構造-11世紀から13世紀における東アジア都城史の可能性-」『東方学』133、15-30 頁、2017年1月
- ・「南宋臨安国城小考」『中国城市史研究論文集』杭州出版社、241-255 頁、2016年12月
- ・「開封のユダヤ(猶太)人について」『長野工業高等専門学校紀要』50、2016年6月

[学会発表](計12件)

- ・二度の開封陥落と中心性の移動 - 中国都城史の轉換點としての靖康の変、歴史科学協議会 第52回大会 2018年12月2日
- ・論五代宋初南郊礼仪变化、7 - 16世紀的信息沟通与国家秩序 第五次工作坊 2018年11月3日
- ・五宋初における南郊儀礼の変化をめぐって、早稲田大学史学会大会 2018年10月6日
- ・大元ウルスの都城空間と王権儀礼をめぐって—遼金都城と大都の比較史的研究—、第18回 遼金西夏史研究会大会 2018年3月11日 遼金西夏史研究会
- ・五代十国時代と郊祀、第203回宋代史談話会 2018年2月24日
- ・金朝自上京會寧府至中都大興府の遷都及其都城空間的变化、比較城市史視野的中国古代都城史研究工作坊、2017年6月3日
- ・遼中京の建設與空間結構、復旦大學歴史系 史學論壇(上海市 復旦大学) 2016年
- ・後周の知開封府王朴の都城建設と宋代の洛陽問題、「第42回(平成28年度)宋代史研究会夏合宿」(箱根高原ホテル) 2016年
- ・都城史上における宋代洛陽 開封と臨安との関わりにおいて、第186回 宋代史談話会(大阪府立大学) 2016年
- ・開封のユダヤ(猶太)人について、2015年度早稲田大学史学会全体会 公開シンポジウム「世界史のなかのユダヤ人」(早稲田大学文学部) 2015年
- ・11から13世紀における東アジア都城史の可能性—遼中京大定府を中心として、「第41回(平成27年度)宋代史研究会夏合宿」(休暇村志賀島) 2015年
- ・中国都城史上における多重城郭制について
- ・第20回 関西比較中世都市研究会、2014年
- ・南宋臨安国城小論、杭州文史学会 南宋臨安城研討会(浙江省杭州市) 2014年

[図書](計3件)

久保田和男共著

- 宋代史から考える、汲古書院 2016年7月
- 中国伝統社会への視角、汲古書院 2015年7月
- 近世東アジア比較都城史の諸相、白帝社、2014年2月

[産業財産権]

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
久保田和男 (KUBOTA, Kazuo)
研究者番号：60311023
- (2) 研究分担者
- (3) 連携研究者
研究者番号：
- (4) 研究協力者
()